

コミュニケーションアップ講座の効果と課題Ⅱ

小林 奈穂 美

序.

1. 我が国におけるキャリア教育の経緯

「キャリア教育」という文言が公的な文書で初めて登場したのは、1999年の中央教育審議会（以下、中教審とする）答申「初等中等教育と高等教育との接続の改善について」においてである。2011年にはキャリア教育を「一人一人の社会的・職業的自立に向け、必要な基礎となる能力や態度を育てることを通じてキャリア発達を促す教育」と定義している（中教審）。特定の科目や、課外活動に限定されるものではなく、様々な学校生活における活動を通じて実践されるものである。

学校教育の中で「キャリア教育」が注目され、意識付けされるようになった背景には、90年代後半にバブル崩壊を社会的な実感として捉えるようになったことが影響している。2002年には、国立教育政策研究所生徒指導センターが調査研究報告書をまとめ、職業観・勤労観を育む学習プログラムの枠組みを示した。そこに示されたキャリア発達にかかわる諸能力(例)は、「人間関係形成能力(自他の理解能力, コミュニケーション能力)」、「情報活用能力(情報収集・検索能力, 職業理解能力)」、「将来設計能力(役割把握・認識能力, 計画実行能力)」、「意思決定能力(選択能力, 課題解決能力)」4領域8能力である。小・中・高と発達段階に合わせ、職業的(進路)発達を促すために育成することが期待される具体的な能力・態度が一覧表で分かりやすく示された。

その後、リストラと同時に若者の失業問題が深刻さを増し、2004年には「ニート」という言葉が経済学者の玄田氏によってイギリスから輸入され全国に広がった。危機感を持った関係省庁である、内閣府、文部科学省、厚生労働省、経済産業省では、「若者自立・挑戦プラン」を策定し、「キャリア教育」がさらに脚

光を浴びることとなる。内閣府「人間力」、厚生労働省「就職基礎能力」、経済産業省「社会人基礎力」、さらに中教審では、高等教育における「学士力」を提唱した。

2011年には中教審がそれらを改めてとりまとめ、「今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について(答申)」の中で、基礎的・汎用的能力として4つの能力とそれぞれ具体的ないくつかの要素で示されている。4つの能力と要素を以下に列挙することとする。

「人間関係形成・社会形成能力」

多様な他者の考えや立場を理解し、相手の意見を聴いて自分の考えを正確に伝えることができるとともに、自分の置かれている状況を受け止め、役割を果たしつつ他者と協力・協働して社会に参画し、今後の社会を積極的に形成することができる力である。この能力は、社会とのかかわりの中で生活し仕事をしていく上で、基礎となる能力である。特に、価値の多様化が進む現代社会においては、性別、年齢、個性、価値観等の多様な人材が活躍しており、様々な他者を認めつつ協働していく力が必要である。また、変化の激しい今日においては、既存の社会に参画し、適応しつつ、必要であれば自ら新たな社会を創造・構築してことが必要である。さらに、人や社会とのかかわりは、自分に必要な知識や技術、能力、態度を気付かせてくれるものでもあり、自らを育成する上でも影響を与えるものである。具体的な要素としては、例えば、他者の個性を理解する力、他者に働きかける力、コミュニケーション・スキル、チームワーク、リーダーシップ等が挙げられる。

「自己理解・自己管理能力」

自分が「できること」「意義を感じること」「したいこと」について、社会との相互関係を保ちつつ、

今後の自分の可能性を含めた肯定的な理解に基づき主体的に行動すると同時に、自らの思考や感情を律し、かつ、今後の成長のために進んで学ぼうとする力である。この能力は、子どもや若者の自信や自己肯定観の低さが指摘される中、「やればできる」と考えて行動できる力である。また、変化の激しい社会にあって多様な他者との協力や協働が求められている中では、自らの思考や感情を律する力や自らを研鑽する力がますます重要である。これらは、キャリア形成や人間関係形成における基盤となるものであり、とりわけ自己理解能力は、生涯にわたり多様なキャリアを形成する過程で常に深めていく必要がある。具体的な要素としては、例えば、自己の役割の理解、前向きに考える力、自己の動機付け、忍耐力、ストレスマネジメント、主体的行動等が挙げられる。「課題対応能力」

仕事をする上での様々な課題を発見・分析し、適切な計画を立ててその課題を処理し、解決することができる力である。この能力は、自らが行うべきことに意欲的に取り組む上で必要なものである。また、知識基盤社会の到来やグローバル化等を踏まえ、従来の考え方や方法にとらわれずに物事を前に進めていくために必要な力である。さらに、社会の情報化に伴い、情報及び情報手段を主体的に選択し活用する力を身に付けることも重要である。具体的な要素としては、情報の理解・選択・処理等、本質の理解、原因の追究、課題発見、計画立案、実行力、評価・改善等が挙げられる。

「キャリアプランニング能力」

「働くこと」の意義を理解し、自らが果たすべき様々な立場や役割との関連を踏まえて「働くこと」を位置づけ、多様な生き方に関する情報を適切に取捨選択・活用しながら、自ら主体的に判断してキャリアを形成していく力である。この能力は、社会人・職業人として生活していくために生涯にわたって必要となる能力である。具体的な要素としては、例えば、学ぶこと・働くことの意義や役割の理解、多様性の理解、将来設計、選択、行動と改善等が挙げられる。

以上の補足として、4つの能力のそれぞれは、独

立したものではなく、相互に関連・依存した関係にあり、均一に身に付けることを求めるものではない。また、学校、地域や子ども・若者の発達段階によって異なることを踏まえ、それぞれの状況に応じてどのような能力を身に付けることとするのか、具体的に設定すべきとしている。

高等教育機関に進学者が8割以上、その中で大学進学者が5割を超えるという現状は、学生の資質も多様化していることを意味する。そして社会の急激な変化と価値観の変化は、言い方を変えれば社会も多様化しているということである。高等教育機関はこの学生と社会の多様化を把握した上で、学校から社会・職業への移行・接続を見据えたキャリア教育をしていく重要な役割を担っていると言える。

2. コミュニケーション能力とキャリア教育

前述した中教審の答申で、基礎的・汎用的能力の中で最も基本的な能力である「人間関係形成・社会形成能力」である。その要素の中でもコミュニケーション能力は厚生労働省が2004年に提言した「就職基礎能力」でも筆頭に挙げられており、さらに、経団連（一般社団法人日本経済団体連合会）の報告によると、所属する企業に行った新卒採用に関するアンケートにおいて、選考で特に重視した点を20項目から5つ選択するという質問の結果、コミュニケーション能力は15年連続で1位であるとされている。社会情勢が目まぐるしく変化し、多様化する世の中であるからこそ、コミュニケーション能力が重視されていると考えられる。

I. 2017年度のコミュニケーションアップ講座について

論叢57号掲載の「コミュニケーションアップ講座の効果と課題」は、2012年度から2016年度まで5年間取り組んだ「コミュニケーションアップ講座」の取り組みについて俯瞰したあと、2017年度の事前、事後アンケートをもとに、4回の講座すべてに出席した75名を対象に、コミュニケーション

スキルに直接関わる 5 項目が講座受講前と講座受講後で、プラスに変化したのかマイナスに変化したのかを比較することを中心に論じたものであった。

ここで、2017 年度の結果について再度確認しておくこととする。

問 2：自分自身の性格や能力について、できる限りのままに伝えようと思う。

回答：全体としては、変化なしが 51% であった。事前アンケートよりプラスに変化した割合は 36% であった。事前に「そう思う」という回答をした割合は 25% から事後 34% に、事前に「ややそう思う」と回答した割合は 40% から事後 49% となった。肯定的に思う傾向の割合は前後で 18% 増加した。事前に「やや思わない」という回答は 4% から事後 1% に、事前に「思わない」という回答は 0%、事後も 0% と変化は見られなかった。否定的に思う傾向の割合は前後でやや減少した。

以上の回答から、自分のことをありのままに伝えることの大事さは、講座受講前に認識していることではあるが、講座を受講することによって、36% の学生がプラスの変化をしており、否定的に考える傾向の減少も加味して、4 回受講の効果とみてよいと考える。

問 4：社会人は都合の良いことやうわべばかりではなく本音で話すと思う。

回答：全体としては、変化なしの学生が 37% であった。事前アンケートよりプラスに変化した割合は 46% であった。事前に「そう思う」という回答をした割合は 4% から事後 16% に、事前に「ややそう思う」と回答した割合は 19% から事後 28% となった。肯定的に思う傾向の割合は前後で 21% 増加した。事前に「やや思わない」という回答は 29% から事後 14% に、事前に「思わない」という回答は 15%、事後は 10% であった。否定的に思う傾向の割合は前後で 20% 減少した。

以上の回答から、社会人は本音で話すか否かに対し、事前、事後で 46% がプラスに変化し、肯定的に回答した学生の割合も 21% 増加した。この要因

は、働いた経験のある社会人に対し「現在や過去の仕事を選んだきっかけや経緯」「渦中にいたときはネガティブに捉えられていたが、振り返ってみると大切な経験だったとポジティブに捉えている経験」についてインタビューをするという課題をやり、それをペアで意見交換したあと、4 名で共有したことが、影響したものと考えられる。さらに 3 名の先輩(4 年次生)からの学生生活や就職活動の経験談という忌憚のない話も影響していると考えられる。

問 7：自分のことを他人に理解してもらう必要があると思う。

回答：全体としては、変化なしの学生が 40% であった。事前アンケートよりプラスに変化した割合は 45% であった。

事前に「そう思う」という回答をした割合は 15% から事後 33% に、事前に「ややそう思う」と回答した割合は 58% から事後 43% となった。全体的には肯定的に思う傾向の割合は 3% の増加であった。

事前に「やや思わない」という回答は 11% から事後 8% に、事前に「思わない」という回答は 1%、事後は 1% であった。否定的に思う傾向の割合は前後で若干減少した。

以上の回答から、自分のことを他人に理解してもらう必要性に関しては、プラスに変化した割合は 45% であったが、肯定的に回答した学生の割合は僅か 3% であった。これは、事前に肯定的に回答している学生が 73% であり、講座受講の有無に関わらず、自分のことを他人に理解してもらうことの必要性を感じているといえる。プラスに変化した学生が 45% であることに着目すると、もともと肯定的に回答していた学生がさらにプラス傾向が強くなった学生と、否定的だった学生やどちらとも言えないと回答した学生がプラスに変化したものと考えられることから、一定の効果があつたと捉えてよいのではないかと考えられる。

問 10：自分自身の考えや気持ちを素直に伝えることは、とても大切だと実感している。

回答：全体としては、変化なしの学生が 59% であった。事前アンケートよりプラスに変化した割合は 22% であった。

事前に「そう思う」という回答をした割合は 35% から事後 56% に、事前に「ややそう思う」と回答した割合は 53% から事後 29% となった。肯定的に思う傾向の割合は 3% と僅かに減少した。それでも 85% が肯定的に捉えており、肯定的に捉えている傾向が強いと言える。

事前に「やや思わない」という回答は 0% から事後 5% に、事前に「思わない」という回答は 1%(0%), 事後も 0% であった。否定的に捉える学生が、事前には 1 名だったところ、事後に 4 名となった。講座を 4 回受けたことで強い否定ではないが、「やや思わない」と捉えた学生がいたことは、気になるところである。

以上の回答から、これも問 7 同様、事前に肯定的に回答している学生が 88% であり、講座受講の有無に関わらず、自分の気持ちを素直に伝えることは大切であると考えていることが分かる。それは、事後に肯定的に回答した割合が 85% と 3% 減少はしたものの、肯定的な回答が変化なしの 59% の中に多く含まれていることから分かる。事前アンケートよりプラスに変化した割合は 22% であったことから、もともと肯定的に回答していた学生がさらにプラス傾向が強くなったと考えられる。

問 11：他人とのつきあいにおいて、相互の理解が深まるような話は必要だと思う。

回答：全体としては、変化なしの学生が 56% であった。事前アンケートよりプラスに変化した割合は 26% であった。

事前に「そう思う」という回答をした割合は 37% から事後 43% に、事前に「ややそう思う」と回答した割合は 47% から事後 43% となった。全体的に肯定的に思う傾向の割合は 2% 増加し、86% が肯定的に捉えており、5 つの質問項目でもっとも高い割合であった。

問 10 同様、肯定的に捉えている傾向が強いと言える。

事前に「やや思わない」という回答は 0% から事後 1% に、事前に「思わない」という回答は 1%(0%), 事後も 1%(0%) であった。否定的に捉えた学生が、今年は事前に 1 名いたところ、事後に 2 名となったことは、問 10 同様、気になるところである。

以上の回答から、これも問 10 と非常に似た結果となった。事前に肯定的に回答している学生が 88% であり、講座受講の有無に関わらず、相互理解の必要性を感じていることが分かる。それは、事後に肯定的に回答した割合が 85% と 3% 減少はしたものの、肯定的な回答が変化なしの 56% の中に多く含まれていることから分かる。事前アンケートよりプラスに変化した割合は 26% であったことから、もともと肯定的に回答していた学生がさらにプラス傾向が強くなったと考えられる。問 10 と非常に似た結果と前述したが、一点着目すべき違いがある。それは、肯定的な回答全体としては、88% から 85% と全く同じ割合で変化したが、その内訳が逆転している点である。問 10 は、そう思うより、ややそう思うが増加したが、問 11 は、やや思うより、そう思うが増加している。このことから、講座に参加することによって、相互理解に関しては、より肯定的に捉える学生が増加したといえることから、一定の効果とみてよいと考える。

この 4 つの結果から、本プログラムの目的にひとつである、「自己理解と他者理解を深めることに重点を置いたプログラムとする」について、一定の効果があったと考えられる。

これは、コミュニケーション力とは「新たな現実・答えを他者と協働しながら創出していく力」であるということ、毎回違う相手に伝えること、聴くことを繰り返し実践することで、実感した結果だと考えられる。

ただし、問 10「自分自身の考えや気持ちを素直に伝えることは、とても大切だと実感している」と「他人とのつきあいにおいて、相互の理解が深まるような話は必要だと思う」においては、否定的な学生が出現した。この調査内容には限界があり、その

原因を明らかにすることはできなかった、と結論づけている。

最後に、コミュニケーションアップ講座の課題として、一番の問題は、調査対象となる4回連続出席者を増やすことである。二番目の問題は、参加意欲を高める工夫として、グーグルフォームを活用した、オンラインアンケートを導入したが、設計の再構築が必要なことである。三番目の問題として、話し手の技法のひとつである「アサーティブ」を意識させるところまでには至らなかった。相手の価値観や考え方が違うときに有用な考え方であり、自己理解、他者理解を深めることにもつながるので、次のプログラムでは、「アサーティブ」を意識したプログラムになるように改良する余地があるということであった。

さらに、研究課題としては、アンケート（事後）の自由記述欄「コミュニケーションや対人関係について、気づいたことはどんなことですか？思うままに書いてください」については分析するまでには至らなかった。この自由記述欄には、参加意欲や、コミュニケーションについての先入観や捉え方の変化や葛藤が顕在していると考えられ、非常に興味深いものであるため、自由記述の分析をすることは課題である。

Ⅱ.2018年度のコミュニケーションアップ講座について

1. コミュニケーションアップ講座の内容について
ここで、改めてコミュニケーションアップ講座の内容について解説する。

高等教育機関のキャリア教育の中では、どのようにコミュニケーション能力アップに取り組むことが効果的であろうか。コミュニケーションは、人と人が言葉や表情、文字、身振りなどを使って意思疎通を図ることである。直接、相手となにかのテーマを共有しながら、バーバルコミュニケーション、ノンバーバルコミュニケーション、ときには文字も使ったワークを行い、自分の意思を正確に伝えること、相手の意思を正確に捉えることを根気よく繰り返すことで、コミュニケーションすることに慣れ、自信がもてるようになれば楽しくなる。以上を踏まえて考えられたプログラムが90分授業4回で構成された「コミュニケーションアップ講座」である。

第一回
概要：①モノの見方・考え方・価値観の多様性を知る

②ノンバーバルコミュニケーションの効果を知る

方法：①お互いの第一印象を言い合った後、自己紹介シートを用いて内面の紹介をしあい、コミュニケーションで印象が変化することを実感できるペアワークを実施する。

②相手が話しやすい態度・話しにくい態度を比較・実感できるペアワークを実施する。同じ絵画を観てセリフを入れるというワークを個人で行った後、ペアワークを行う。さらに別の絵画を観てセリフを入れるというワークを個人で行った後、4名グループを行う。

第二回

概要：意思決定（職業選択）プロセスを知ること、漠然とした不安を軽減し、将来の可能性を拓く過ごし方及びコミュニケーションについて理解を深める。

方法：社会人インタビュー（事前課題）を実施し、複数回のペアワークを通して共有する。その後、自分自身の過去の意思決定プロセス（高校・部活・アルバイト選択のきっかけや理由）を振り返り、自己理解を深める。

4名グループで、自己紹介と身近な社会人への事前インタビューの結果から、生き方や働き方のきっかけを共有し、最後にフィードバックシートを使い、自分以外の3人に「大学時代に経験することをお勧めすること」を中心にフィードバックを行う。

第三回

概要：自分の3年後はどんな風になっているのだろう。就職活動で内定を獲得した人は、どのように意思決定したのだろうか。どのようなターニングポイントを経て成長し、今に繋がっている

るのだろうか。大学生活も終盤を迎え、社会に出る直前の先輩の話参考に、自分の将来のキャリアデザインについて考える。

方法：就活を終えた学部4年生(3名×2クラス)をゲスト・スピーカーとして招き、インタビューを行う。身近な先輩から、意志決定プロセスやターニング・ポイントについて学ぶことで、相互理解の重要性・キャリアへの影響力を知る。

第四回

概要：身近な先輩からターニング・ポイントについて学び、相互理解の重要性・キャリアへの影響力を知る。人は、ターニングポイントを通して、生き方、働き方、学び方に新しい視点・深い見方と出会う。それを他者と共有することで、人の言動が、何に根差しているのかに思いを馳せることができ、相手理解のきっかけになる。また、自分らしい生き方・働き方・学び方は人との関わりの中で磨かれていくことを理解する。

方法：キャリアデザインワークブックを用いて、社会人や就活のイメージの変化について仲間と相互インタビューを行う。

以上、4回に亘り繰り返し冒頭で伝えたことは、この授業の目的は「他者との信頼関係を通して、友人や大人や社会とつながっていけるような基本的な力をつけること」であり、この授業で扱うコミュニケーションスキルとは「対人スキル(関係構築力)、表現スキル(伝える力)、傾聴スキル(聞く力)」であり、この授業で目指すコミュニケーション力とは「新たな現実・答えを他者と協働しながら創出していく力」である。

2. 結果

2018年度の取り組み成果を検証する。有効回答数は、4回の講座に出席した男子76名、女子22名、合計98名である。

①2017年度との比較分析

まずは、昨年と同様、アンケート調査より、コミュニケーションスキルに関わる直接的な5項目について

分析する。2017年度の数字は()で示すこととする。

問2：自分自身の性格や能力について、できる限りありのままに伝えようと思う。

回答：全体としては、変化なしが55%(51%)であった。事前アンケートよりプラスに変化した割合は27%(36%)であった。事前に「そう思う」という回答をした割合は33%(25%)から事後42%(34%)に、事前に「ややそう思う」と回答した割合は52%(40%)から事後44%(49%)となった。肯定的に思う傾向の割合は前後で1%(18%)増加した。事前に「やや思わない」という回答は3%(4%)から事後1%(1%)に、事前に「思わない」という回答は0%(0%)、事後は3%(0%)であった。否定的に思う傾向の割合は前後で変化がなかった。

以上の回答から、自分のことをありのままに伝えることの大事さは、講座受講前に85%が肯定的に捉えており、肯定的に思う傾向の割合が1%しか増加しなかった点からは、講座を受講することによる効果があるとは言い難い。しかし、27%の学生がプラスの変化をしており、否定的に思う割合の変化がなく、その値もごく僅かであったことは、4回受講の効果とみてよいと考える。このように受講前から肯定的に考える傾向が高い場合は、受講前後の効果を見ることは難しい。

昨年度は、肯定的に思う割合が受講前の65%から受講後に83%と増加したこと、36%の学生がプラスの変化をしたこと、否定的に考える傾向が減少したこと、というように受講の効果とみることが容易であった。

問4：社会人は都合の良いことやうわべばかりではなく本音で話すと思う。

回答：全体としては、変化なしの学生が39%(37%)であった。事前アンケートよりプラスに変化した割合は39%(46%)であった。事前に「そう思う」という回答をした割合は10%(4%)から事後14%(16%)に、事前に「ややそう思う」と

回答した割合は 22%(19%) から事後 26%(28%) となった。肯定的に思う傾向の割合は前後で 7%(21%) 増加した。事前に「やや思わない」という回答は 20%(29%) から事後 18%(14%) に、事前に「思わない」という回答は 16%(15%)、事後は 10%(10%) であった。否定的に思う傾向の割合は前後で 8%(20%) 減少した。

以上の回答から、社会人は本音で話すか否かに対して、事前、事後で 39%(46%) がプラスに変化し、肯定的に回答した学生の割合も 7%(21%) 増加した。この要因は、去年同様働いた経験のある社会人に対し「現在や過去の仕事を選んだきっかけや経緯」「渦中にいたときはネガティブに捉えられていたが、振り返ってみると大切な経験だったとポジティブに捉えている経験」についてインタビューをするという課題をやり、それをペアで意見交換したあと、4名で共有したことが、影響したものと考えられる。さらに3名の先輩(4年次生)からの学生生活や就職活動の忌憚のない経験談も影響していると考えられる。これは、昨年度、この講座内容が功を奏したことを受け、継続したものであり、一定の効果を期待したものである。しかし詳細にみると、プラスに変化した割合は、昨年度より7ポイントマイナス、肯定的に思う傾向は前後で昨年度より14ポイントマイナス、否定的に思う傾向も昨年度より12ポイントマイナスという結果である。予想を下回る結果となったことは否めない。インタビューする社会人の条件や質問内容の見直しの余地があると考えられる。

問7：自分のことを他人に理解してもらう必要があると思う。

回答：全体としては、変化なしの学生が52%(40%)であった。事前アンケートよりプラスに変化した割合は34%(45%)であった。

事前に「そう思う」という回答をした割合は22%(15%)から事後40%(33%)に、事前に「ややそう思う」と回答した割合は47%(58%)から事後40%(43%)となった。全体的には肯定的に思う傾向の割合は11%(3%)の増加であった。

事前に「やや思わない」という回答は4%

(11%)から事後2%(8%)に、事前に「思わない」という回答は0%(1%)、事後も0%(1%)であった。否定的に思う傾向の割合は前後で2%減少した。

以上の回答から、自分のことを他人に理解してもらう必要性に関しては、プラスに変化した割合は34%と昨年度の45%をやや下回ったが、肯定的に回答した学生の割合は昨年度の3%から11%とアップした。事前に肯定的に回答している学生が69%であり、講座受講の有無に関わらず、自分のことを他人に理解してもらうことの必要性を感じているがさらにプラスに変化した学生が34%であることに着目すると、もともと肯定的に回答していた学生がさらにプラス傾向が強くなった学生と、否定的だった学生やどちらとも言えないと回答した学生がプラスに変化したものと考えられることから、昨年同様、一定の効果があったと捉えてよいのではないかと考える。

問10：自分自身の考えや気持ちを素直に伝えることは、とても大切だと実感している。

回答：全体としては、変化なしの学生が56%(59%)であった。事前アンケートよりプラスに変化した割合は22%(22%)であった。

事前に「そう思う」という回答をした割合は46%(35%)から事後50%(56%)に、事前に「ややそう思う」と回答した割合は42%(53%)から事後47%(29%)となった。肯定的に思う傾向の割合は9%増加した。昨年度は3%の減少であったことを考えると、今年度は昨年度より肯定的に捉えている傾向が強いと言える。

事前に「やや思わない」という回答は4%(0%)から事後0%(5%)に、事前に「思わない」という回答は0%、事後も0%であった。事後に否定的に捉える学生が、一人もいなかったことは、昨年度は事前に1名だったところ、事後に4名となったことを考えると、4回講座の大きな成果と言える。

以上の回答から、これも問7同様、事前に肯定的に回答している学生が88%であり、講座受講の有無に関わらず、自分の気持ちを素直に伝えることは

大切であると考えていることが分かる。それは、事後に肯定的に回答した割合が5つの質問項目でもっとも高い割合の97%であり、事前より9%増加したことから、肯定的な回答が変化なしの56%の中に多く含まれていることから分かる。事前アンケートよりプラスに変化した割合は22%であったことから、もともと肯定的に回答していた学生がさらにプラス傾向が強くなったと考えられる。これは昨年度を大きく上回る成果として捉えたい。

問11：他人とのつきあいにおいて、相互の理解が深まるような話は必要だと思う。

回答：全体としては、変化なしの学生が50%(56%)であった。事前アンケートよりプラスに変化した割合は26%(26%)であった。

事前に「そう思う」という回答をした割合は45%(37%)から事後49%(43%)に、事前に「ややそう思う」と回答した割合は42%(47%)から事後36%(43%)となった。全体的に肯定的に思う傾向の割合は2%減少した。それでも事後に85%(86%)が肯定的に捉えており、昨年同様で問10同様、肯定的に捉えている傾向が強いと言える。

相互理解の必要性を感じていることが分かる。それは、事後に肯定的に回答した割合が85%と2%減少はしたものの、肯定的な回答が変化なしの50%の中に多く含まれていることから分かる。事前アンケートよりプラスに変化した割合は26%であったことから、もともと肯定的に回答していた学生がさらにプラス傾向が強くなったと考えられる。

②自由記述についての分析

ここで、これまで分析してこなかった自由記述欄の内容について分析を試みることにする。本アンケートには、2つの自由記述欄がある。

問12「自分の将来を色に喩えると何色ですか？また、それはどうしてですか？」

問13「普段のコミュニケーションや対人関係について感じている課題はどんなことですか？思うままに記述してください。」

である。本論では、コミュニケーションスキルに直接関係する問13に着目する。

問1～問11までの選択式質問の有効回答数は、4回の講座に出席した男子76名、女子22名、合計98名であった。問13の記述式に関しては、事前事後

表1 事前・事後の変化の割合

単位%	問2	問4	問7	問10	問11
変化なし	55	39	52	56	50
アップ回答	27	39	34	22	26
事前肯定	85	33	69	88	87
事後肯定	86	40	80	97	85
前後差数	1	7	11	9	-2

事前に「やや思わない」という回答は4%(0%)から事後1%(1%)に、事前に「思わない」という回答は0%(1%)、事後も0%(1%)であった。否定的に捉えた学生は減少した。

以上の回答から、問10と非常に似た結果となった。事前に肯定的に回答している学生が87%(88%)であり、講座受講の有無に関わらず、

ともにこの欄が未記入だった学生は男子4名であった。事前は未記入であったが、事後に記入していた学生は男子7名、女子2名の計9名であった。反対に事前に記入していたが、事後は未記入であった学生は男子2名であった。この結果から4回連続出席することで、コミュニケーションや対人関係についての課題についての意識づけがある程度なされ

たと捉えることができると思う。

事前には記入していたものの、事後に未記入であった男子2名はいずれも母国語が日本語ではない学生であった。これは、意識づけされたか否かというより日本語力の問題ではないかと考えられる。

事前より、事後の文字数が増えている学生は、事前、事後に記入していなかった学生4名と、事前に記入していたが事後は未記入であった学生2名を除く、92名であった。文字数という量的尺度だけみると、コミュニケーションや対人関係について4回の講座受講によって文章化することができるようになったと思われる。コミュニケーションは、人と人とが言葉や表情、文字、身振りなどを使って意思疎通を図ることであり、自由記述欄に書くという行為は、文字による意思疎通であると捉えると、4回連続出席することで、92名の学生が、書くことへの抵抗が薄れ、文字によるコミュニケーション力アップしたと考えることもできる。毎回授業の最後に「今日学んだこと」を論理的に書くというレポートを課していることもよい意味で影響していると思われる。

では、次に質的にどのように捉えることができるかについて、カテゴリー分析を試みることにする。

カテゴリーの基本は、本講義の目的と合わせた、「対人スキル(関係構築力)」「表現スキル(伝える力)」「傾聴スキル(聞く力)」の3項目、第3回、第4回で強調して伝えた「自己理解」「他者理解」「相互理解」、以上には当てはまらないが回答を「その他」の7項目とした。

事前の回答数は87名であった。降順に示すと以下のようになった。

- 「表現スキル(伝える力)」48名
- 「対人スキル(関係構築力)」21名
- 「相互理解」4名
- 「他者理解」3名
- 「傾聴スキル(聞く力)」2名
- 「自己理解」0名
- 「その他」9名

事前の回答から、伝える力に課題があると意識している学生が、全回答者数の55%であることが明らかになった。その次に課題があると意識していることは、関係構築力で24%であった。

コミュニケーションは、自分が相手に伝えることであり、「自分から話せない」「説明が下手」「自分の意見を伝えられない」など、自信がない、難しいと捉えている。

関係構築力では、「人見知りなこと」「初対面の人とのコミュニケーションがうまくとれない」など、苦手意識を持っている傾向が見られた。

事後は事前の7項目に当てはまらないが回答の多かった「コミュニケーションは大事」を加えた8項目とした。事後の回答数は91名であった。降順に示すと以下のようになった。

- 「表現スキル(伝える力)」26名
- 「傾聴スキル(聞く力)」26名
- 「対人スキル(関係構築力)」13名
- 「コミュニケーションは大事」9名
- 「他者理解」6名
- 「相互理解」6名
- 「自己理解」2名
- 「その他」3名

事後の回答から、伝える力に課題があると意識している学生が、全回答者数の約29%であり、聞く力に課題があると意識している学生も同数の約29%であった。

関係構築力に課題があると意識した学生は約14%であった。4回の講座に出席することにより、コミュニケーション力で課題であり大切なことは、伝える力や関係構築より、聞く力であることが強く意識されたという結果となった。これは、第一回目で相手が話しやすい「聴き方」を知るワークを冒頭に行ったことがプラスに影響したものと思われる。それが第二回目以降もワークする相手が毎回変わることで意識され続けたと考えられる。

また、4回の講座に出席することにより、事前に

はなかった項目である「コミュニケーションは大事」と実感した学生が約 10% 出現したことも効果のひとつであると捉えることができる。

さらに、第三回目と第四回目に強調した相互理解については、事後に、「他者理解」6名、「相互理解」6名と、事前より微増していること、「自己理解」については事後に2名出現したことから、毎回違う相手と、聴き方を意識して対話することで、相互理解に繋がった学生も散見されたが、強調した割には、効果があったと言い切れるものではなかったと考える。

ここで、さらに個別の変化の分析を試みる。

事前に、人見知りであると自己分析している学生が6名いた。

・事前「人見知りなので何を話したらいいかわからなくなる」

⇒事後「話す人も大事だけど、話を長続きさせるには聞く人の方が大事ということ」

・事前「人見知りなこと」

⇒事後「コミュニケーションとすることは大事だと思った」

・事前「時々人見知りをすることがありますが、基本的には明るく接することを心掛けるようにしています」

⇒事後「意外と自分からでもしゃべれたので、それは一番気づいていたポイント」

・事前「人見知りで自分から話そうという気になるまでに時間がかかること」

⇒事後「目を見て話すこと、相づちをうつこと、聞き手にまわったとき何を質問すればいいのが考え話を広げること」

・事前「人見知りで知らない人に声かけられないこと。一人でいることが多い事」

⇒事後「知らない人に声をかけるのはとても難し

かったのですが、授業という建前の中で、努力して声をかけてみると意外と理解が深まるものなんだなと思いました」

・事前「コミュ力がないので一定の人とは一度心を開くといい関係になれるがなかなか心を開いて話せなく、人見知りになってしまうことが多い」

⇒事後「最初はうまく会話するのはずかしいが、少し話すだけで心を開くことができる」

以上、人見知りであることを課題としている学生は、人見知りではなくなることはなくても、4回の講義に参加することで、授業で与えられた共通のテーマという範疇では、コミュニケーションができるという体験ができたり、聴き方がポイントであるという気づきがみられたことは、プラスの効果とみることができる。

事前に、初対面の人とのコミュニケーションに自信がないという学生が11名いた。

・事前「慣れていないとしっかりとしゃべる事ができない。最初から自分から話しかける事ができない」

⇒事後「話す方が大事だと思っていたが、聞くのが大事だと分かった」

・事前「初対面の人に自分から話しかけられない。話す理由がないと話せない」

⇒事後「コミュニケーションでは、自分が話すだけでなく、相手に質問し相手の話も引き出し、さらに質問などで広げることも必要である」

・事前「最初に話しかけるのが苦手で、話しかけることができればよいと思うから、話しかけることができるようになりたい」

⇒事後「2人組とかになってみて話をするよりも聞くことが大切だと思った」

・事前「初対面の人と話すのが苦手」

⇒事後「他の人の意見を聞いて、自分たちにとって新たな発見になることはすごく良いことだと感じた」

・事前「初対面の人でも目を見てはっきりと話すこと」

⇒事後「社会に出るにおいて、コミュニケーションは必ず大切になると思う」

・事前「初対面の人と会話するのは少し緊張する」
⇒事後「自分から質問するのはとても大切だと思いました」

・事前「初対面の人と話す時にまだ緊張してしまう」

⇒事後「私は話すことがコミュニケーション能力だと思っていましたが、聞き手が重要なのだと思いました」

・事前「はじめて話す人は話が續かない」
⇒事後「相手の事をどう理解するか、自分のことをどう理解してもらうかが大切だと思いました」

・事前「初対面の人とは少し人見知りになりやすい。」
⇒事後「聞き手が重要」

・事前「仲良くなってからは早いけど、自分から初対面の人に話すことがあまりできないから仲良くなるまでが遅い」

⇒事後「聞く側によって会話がはずむかはずまないか決まる。相づちを打ってもらっただけで話やすいと感じた」

・事前「初めての人とあまりうまく話せない」
⇒事後「話す側だけでなく聞き手も重要である」

以上、初対面の人とのコミュニケーションに自信がない学生は、自信がもてるようになったという明言はしていないが、4回の講義に参加することに

よって、質問するなど聞き方の方法を駆使して聞く力を意識することで、初対面の人に対する苦手意識はある程度払拭されたと読み取ることができる。相手に対する理解が深まる体験をしたという学生もあり、講義の効果とみることができる。

事前に、自分の気持ちを上手く伝えられないという課題を抱えている学生が12名いた。

・事前「話を理解し合えないことが多々ある。目上の人に対しての敬語が不完全。同年代以下の人と関わろうと思えない」

⇒事後「あまり話さないと思っていても、案外話せば話ははずむ」

・事前「自分の思ったことをなかなか言うことができない」

⇒事後「人の目を見て話すのと見ないで話すのでは物事の捉え方が違う」

・事前「上手く自分の意見を伝えられない時がある」

⇒事後「相手の立場になって考えて話すことも大事で、一方的にならないようにすることが大切だとわかった」

・事前「自分はいいと思っていても相手はダメという個人差が難しいと思います」

⇒事後「相手のことを考えつつ話すことが大切である。」

・事前「強く相手に言えない」
⇒事後「相槌は大事」

・事前「自分の思っていることがうまく相手に伝わらないことがある」

⇒事後「どんな人とも一度はコミュニケーションをとっていくことが大事だと感じた」

・事前「思った事を全部言えない」

⇒事後「話す時は相手を見て相槌をうったりすることが最初の間関係に大事だと気がきました」

・事前「はずかしがる。小さなこと、普通の事を悩みに悩んで言えなかったりする」

⇒事後「やはり色々なタイプのひとがいると分かった。その人によって話し方考え方が違ったりするので面白さもあった」

・事前「自分が思ったことを素直に伝えることができない。相手にどう思われるか心配になる」

⇒事後「人と話すことはとても簡単だと思った(友達を作る)」

・事前「自分と相手の考え方や価値観、認識の違いがあって上手く伝わらないこと。思ったことを思ったままに伝える事は難しい」

⇒事後「初めましての人と話すことが苦手だったけど、何度も体験することで苦手ではなくなりました。人との関わりは何度も経験することだなと思いました」

・事前「自分の思いを言葉にすることが自分にとって難しいと感じる」

⇒事後「自分の事を話す、自分を出すことで相手もこたえてくれる！少しの勇気が大事だと思った」

・事前「すぐに言葉が出てこない時がある」

⇒事後「自己紹介は話がつづくが、フリートークのようなものになると話しづらいところがある」

以上のことから、自分の気持ちを上手く伝えられないという課題を抱えている学生は、4回の講義に参加することで、10番目に象徴されるように、いろいろな人と対話を繰り返すことが、うまく伝えられることに繋がり、11番目にあるように、相互理解が意識付られることに繋がる体験は、大事であるという気づきがあったことは意義があり、講義の効果とみることができると考える。

以上のことから、5件法ではみえてこなかったコミュニケーション力や対人関係に関する変化を、自由記述欄のカテゴリー分析により補完することができたことは、今後のコミュニケーション力アップ講座の継続の一助となるものである。

なお、以上2017年、2018年の分析に用いたアンケートは、研究に使用する同意を得た学生を対象にしたものである。

Ⅲ 調査の限界と今後の課題

今回、事前に肯定している質問項目に対しては、事後も肯定しており4回の授業の効果が見えにくいということが改めてわかり、自由記述欄の分析を加味することによって補完することが出来たと思われる。しかしながら5件法に関しては質問内容を含め、アンケートの設計の再構築の必要性があると考えられる。2019年度も2018年度と同様に12月から1月にかけて、4回のコミュニケーションアップ講座が予定されているので、アンケートの再設計を試みたいと考える。

参考になる測定尺度として、コミュニケーション・スキル尺度であるENDCOREsによる調査も検討したい。

また、女子の母数が少ないということで、男女差を分析していない。また、2017年度に教室毎の差がほとんどなかったため、今回も分析していない。さらに、本アンケートの自由記述のうち、問12「自分の将来を色に喩えると何色ですか？また、それはどうしてですか？」については分析を行っていない。事前、事後の色の変化やその理由から、1年次生の将来に対する現状を捉えることができれば、興味深い知見が見いだされる可能性がある。以上を今後の研究課題としたい。

参考文献

・松原達哉ら編集「産業カウンセリング辞典」日本産業カウンセリング学会監修、2008年、金子書房

- ・文部科学省 「中央教育審議会答申 今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について」, 2011年, 株式会社 ぎょうせい
- ・一般社団法人 日本経済団体連合会 「新卒採用に関するアンケート調査結果」
<<http://www.keidanren.or.jp/policy/2017/096.pdf>>
(2018.8.12 参照)
- ・神奈川県立総合教育センター 「平成 26 年度コミュニケーションに関するアンケート調査報告書」
<<https://www.edu-ctr.pref.kanagawa.jp/kankoubutu/h26/pdf>> (2019.2.20 参照)
- ・松井豊・宮本聡介編 「心理測定尺度集 堀洋道監修 第Ⅴ巻：個人から社会へ〈自己・対人関係・価値観〉」, 2011年, サイエンス社